

新潟県内国立病院薬剤科勉強会を開催して

さいがた医療センター 薬剤科 内藤 靖雄

はじめに

平成26年11月8日（土）、新潟病院を会場として新潟県内の国立病院機構3施設の薬剤科職員13名が参加して合同勉強会を開催したので報告いたします。

新潟県は、日本海を望んで南北331kmの海岸線を有し、都道府県では5番目の面積を誇っています。人口密度は低いものの、明治時代には日本で1番人口が多かった県でもあります。そのような新潟県にある3つの施設は、北から西新潟中央病院（新潟市）、新潟病院（柏崎市）、さいがた医療センター（上越市）に位置し、どの施設からも潮の香りを覚えることができるほど病院の建物が海岸の近くにあります。

開催会場は、7月に完成したばかりの新病棟の見学会を兼ね、3施設の間ということもあり樋口順一薬剤科長にご尽力いただき新潟病院の施設をお借りしました。

開催までの経緯

独立行政法人化以前、新潟県内には国立病院・療養所が8施設あり、その全ての施設の薬剤師及び薬剤助手が参加して、“地区例会”と称した研修会や親睦会を行っていました。しかしながら、統廃合により現在の3施設となってから地区例会は開催していませんでした。

そのような中、西新潟中央病院の高橋省三薬剤科長の提案をきっかけに、“地区例会”をリニューアルの上復活させようという機運が高まり、さいがた医療センター薬剤科が中心となって開催に向け、企画・立案を行うこととなりました。

“地区例会”を“勉強会”と改め、県内の3施設の薬剤科職員の知識の向上や、情報交換はもとより、日頃から親睦を図ることにより、災害時や緊急時の相互協力体制を取り易くすることを目的として、今後も継続していけるような会を目指しました。

勉強会の様子

当日は、紅葉が見頃の時期とも重なり、新潟病院のすぐ近くにある赤坂山公園は紅葉狩りに来た大勢の観光客で賑わっていました。

勉強会は、新病棟1階にある療育ホールを使用して13時からの開始を予定していましたが、開催を待ちきれない気持ちの表れか30分前にはほとんどの参加者が集まっていたため、少し早めてスタートしました。内容については、開催前に意見を募り、3施設の業務に共通した話題であること、講義だけではなく実技を取り入れた勉強会であることを前提に検討し、関信地区国立病院薬剤師会の研修会や千葉医療センターで開催した薬剤師スキルアップセミナー等で実績のあるテルモ株式会社と協力を依頼しました（資料1）。

資料 1

新潟地区国立病院薬剤科勉強会

日時：平成 26 年 11 月 8 日（土）13：00～17：00
会場：国立病院機構 新潟病院 新棟 1 階 療育ホール

会 次 第

司 会 内 藤 靖 雄 先生（さいがた）

開 会 の 辞 13:00～13:05 樋 口 順 一 先生（新潟）

趣 旨 説 明 13:05～13:15 山 口 正 和 先生（さいがた）

研 修 課 題

1. 講 義 13:15～14：15

「輸液・注射に使用する器材」

テルモ株式会社 新潟支店 堀 井 健 一 先生

―― 休 憩 ――― （15 分）

2. 実 技 14:30～16：00

その 1 「輸液セット、輸液ポンプ、シリンジポンプの使い方」

その 2 「輸液ラインからの薬剤投与の実際」

テルモ株式会社 新潟支店 新潟 B チーム

全 体 会 議 16:00～16:25 実行委員 大 竹 将 司 先生（西新潟中央）
串 田 祐 亮 先生（新潟）

閉 会 の 辞 16:25～16:30 高 橋 省 三 先生（西新潟中央）

実際の勉強会では、樋口科長の開会の辞に続いて、さいがた医療センターの山口正和薬剤科長から勉強会の趣旨説明がありました。その後、テルモ株式会社の講師による「輸液・注射に使用する器材」の講義、「輸液セット・輸液ポンプ・シリンジポンプの使い方」、「輸液ラインからの薬剤投与の実際」について実技、課題を交えた研修という形で進行了しました。

前半に行った「輸液・注射に使用する器材」の講義では、輸液セットや注射セットの形状と構造について、実物を手に取り観察しながら学びました。また、後半に行った「輸液セット・輸液ポンプ・シリンジポンプの使い方」では、参加者が 3

グループに分かれ、輸液やシリンジをポンプに装着し、指定された投与方法に従い実際にセッティングを行いました。また、セッティングの際のトラブルへの対処法についても教えていただきました。そして、それらの講義・実技内容を踏まえ、「輸液ラインからの薬剤投与の実際」について、課題に取り組みました。課題は 3 題あり、各グループでディスカッションを行い、グループ毎に発表をする形式で行いました（写真 1）。

研修が終了したあと、全体会議として実行委員より、事前に行った勉強会開催に向けてのアンケート結果の報告と今後の会の運営について連絡が行われました。



写真1



写真2

最後に、高橋科長から閉会の辞をいただき、勉強会は盛会の内に終了となりました（写真2）。

その後、樋口科長のご厚意により、完成したばかりの新病棟をはじめ新潟病院の薬剤科を含めた施設見学をさせていただきました。新潟病院には、旧病棟を利用した美術館があり、筋ジストロフィー症の車椅子の画家である佐藤伸夫さんの作品が展示されていました。美術館では、勉強会の緊張から解き放たれた参加者がひと時作品に見入っていました。その他にも、最先端のリハビリテーション設備などの見学をさせていただいた後、次回開催を期待しつつ散会となりましたが、自由参加による懇親会では口頃の業務についての情報交換を行い、有意義な1日を過ごすことができました。

開催後アンケートについて

勉強会終了後、参加していただいた先生、今回参加できなかった先生全員を対象に、アンケートを実施しました（資料2）。

アンケートの配布と回収は各施設の実行委員を通してメールおよび郵送で行いました。

アンケート結果について

アンケート回答者は、3施設の全薬剤師20名の内18名（回収率90%）でした。

今回の勉強会への参加について（設問1）では、回答者18名中13名が参加、5名が不参加と回

答がありました。不参加理由について（設問2）は、「業務の都合のため」が3名、「他に予定があったため」が2名でした。また、設問3では、今回の勉強会の内容についても5段階で評価していただきました。「研修内容は理解出来ましたか」、「テーマに対して興味を持てましたか」、「新しい知識を得ることが出来ましたか」、「自分の業務に役立つと思いますか」の4つの設問に対し、参加された全ての先生がそう思う、ややそう思う、の高い評価でした。記述形式の回答については別途資料にまとめました（資料3）。

まとめ

本勉強会を企画・開催出来たことがとても嬉しかったとともに、業務の都合などで参加できなかった先生においても、次回都合が合えばぜひ参加したいとの回答があり、勉強会開催の成果を感じました。

次回の開催に向けて、今回のような実習形式で実際に体験することが、業務や臨床現場につなげられるという意見を多数いただきましたが、中には、各施設で特色が異なる業務を発表し合い、意見交換を行うことで業務改善やレベルの高い発表に繋げられるのではないかと意見もありました。学会に向けた練習の場として本勉強会を利用するなど、参考にさせていただきながら今後も企画を行っていきたいと考えています。研修したいテーマについても幅広い提案をいただき、先生方

(資料2) 開催後アンケート内容について(設問1～3:選択式、設問4～9:記述式)

- 設問1 今回の勉強会への参加について
設問2 不参加理由について
設問3 今回の勉強会の内容について
1. 研修内容は理解できましたか
 2. テーマに対して興味を持てましたか
 3. 新しい知識を得ることができましたか
 4. 自分の業務に役立つと思いますか
- 設問4 今回は実習形式でしたが、このような形式での勉強会は如何でしたか
設問5 今後、研修したいテーマはありますか
設問6 3施設での勉強会を継続して行っていくために、ご要望、ご意見がありましたらお聞かせください
設問7 皆さんが考える勉強会の企画がありましたらご提案ください
設問8 今後、他施設共同臨床研究を行うとしたら、研究の企画、立案に参加したいですか。ご意見をお聞かせ下さい
設問9 その他、今回の研修についてご希望やご意見がありましたらお聞かせください

(資料3)開催後アンケート結果(設問4～9:記述式)

- 設問4 ・実際に触れたり体験することで、より知識が深まると思うので、今後も実習形式が良いと思う(8名)
・普段行わない事だったので、とても新鮮であった、また、医療機器の進歩が素晴らしいと感じた
・適度に会話や質疑応答があったため、眠くならなくて良いと思う
・時間・内容ともに良かったと思う
・可能であれば、午前中から始めて、各施設での状況や、より良い方法を見出せたらよいのではないかと
・ランチョン形式でのディスカッションの時間を設けてもよいのではないかと
- 設問5 ・フィジカルアセスメント(5名) ・今回の輸液関係の続編(2名) ・解剖学、病態生理学的
・医療安全 ・簡易懸濁法 ・在宅医療について
・軟膏の塗り方について ・注射剤の配合変化 ・救急対応
・3施設に共通する神経内科領域、てんかん、調剤全般、糖尿病などの生活習慣病(2名)
・今回のような実際に現場で役立つものが良い
・病棟薬剤業務の進め方、プレアポイド報告の推進について
・医療機器(呼吸器系や透析関係など)に関して
- 設問6 ・実行委員の負担が大きくなりたくないこと(4名)
・年1回程度の開催頻度で時期を決めること。
→その都度主担当を決め、他に各施設から実行委員を選出し、全施設で開催できるような形式を確立していくのが良い。
→開催を当番制にして、特定の施設だけに負担がかかるのを避けたほうがよい(5名)
・あまり無理をせず、身の丈にあったものから取り組み、その後、色々なものに発展させていったほうが良い。
・負担を考えると、(今回のように)メーカー等に講演していただくのがよい。
・早めの日程調整と、他の勉強会と被らないよう配慮してほしい
・現実的には、地理的に中間地点の柏崎(新潟病院)が便利ですが、1施設だけに負担を強いるのは長続きしないと思うので、持ち回りが良い。
・交通の便の良い会場で行ってほしい。
・あくまで自主的な活動という流れは崩したくない
- 設問7 ・現役の先輩方の経験談を聞くのも良いのではないかと(2名)
→各施設で専門や認定の資格を取得している薬剤師から、その分野での最近の話題提供や資格取得に必要なことを講義してもらう。
→新潟県出身のNHO薬剤師を招待し、講義をお願いする。
・抗菌薬使用量のサーベイランスなど
・薬剤管理指導における症例報告の書き方、ヒヤリハット対策報告、科内検討案紹介
・各施設で、鑑査を受けた際に指摘を受けた点、指摘への対応をお互いに示し合うことで、業務のスキルアップにつながると思う
・簡易懸濁法導入を実際に行った施設から、導入の注意点などを踏まえた講義を行ってほしい
・各施設で特色が異なるので、それぞれの得意分野をレクチャーし合う。
・業務上の悩みや工夫していることなどを持ち寄って意見交換会を行う
- 設問8 ・出来る限りぜひ参加したい(7名)
・薬剤科として参加するのは良い。しかし、3施設の診療構成を考えて行うべきである。
・神経難病における医薬品の適正使用(この地域では、まだ患者1人あたりの医薬品使用量が多い。薬剤師が患者の状態を把握しながら、処方内容などに反映して行けるのではないかと)
・興味はあるが、実際に行うとなると日常業務がやはり優先事項であり、どこまで実現できるか、各々の病院で診療科も患者も異なるので、難しい気もする。
・カルテ調査、処方箋調査を中心に、レトロスペクティブな解析調査を通して、まずは統計学的処理の方法などを学ぶことから始めてみてはどうか。
・県内3施設で実施可能な研究テーマを見つけることが必要。施設の共通性や、どの施設でも行っている業務などから抽出できると良い。
・各施設の治験担当の方の協力が必須となると思うが、3施設が共通して取り組める疾患があれば、学会発表や論文投稿もできるような取り組みができると思う。
・テーマの設定が鍵になると思う。
- 設問9 ・今回同様、懇親会はあったほうが良い。色んな話ができて有意義であった。
・今回の研修では、他の病院内の見学ができたことが良かった。また、病院内で力を入れているところや、特別な業務などがあれば、ぜひ教えてほしい。
・学会に向けた練習の場にしても良いのではないかと。(2名)
→異なる疾患を対象としている施設の先生が集まって、気がついた点を挙げてもらえば、よりグレードの高い発表につながれる。
・勉強会や研修会にこだわらず、飲み会や親睦会などの目的で、温泉1泊ツアーの開催などもあって良いと思う。
・開催前のアンケートから、1泊での開催の要望が意外と多かったように感じた。岩室温泉なんて声も耳にした気がしますが値段が高いです。もし実際に行うとしたら、リーズナブルで、美味しい宿はいくつも紹介できます。また、3施設で集まることを考えると、交通の便の良い所が条件となると思う。
・次回は是非参加したい
・次回も是非参加したい
・研修の時間は、もう少し短くても良いのではないかと。立地的に遠方となる先生もいる。3施設での連携強化、若手育成が目的なので、交流の時間を長く取りたい。

の意識の高さに驚くとともに、次回開催への期待を強く感じました。

また、今回の企画・運営やアンケート結果から、新潟県という地理的な条件下で、人が集まること自体が負担の1つであることが伺えました。今後は、インターネットを介したビデオ会議など、既存のシステムを用いて行えるようなミーティングなども視野に入れ、様々な交流を行っていければと考えています。

そして、多施設共同臨床研究についての設問についても多くのご意見、ご指摘をいただきました。昨今の薬剤師業務の拡充に伴い、薬物療法の有効性、安全性の向上が強く求められています。その向上に寄与するためには、臨床研究を通して、その成果を社会に発信する必要があると考えます。関信地区国立病院薬剤師会には、共同研究助成制度があります。この制度は、関信地区国立

病院薬剤師会会員が代表者として行う研究課題で、医療薬学領域の臨床研究を企画・実施できる土壌を活かし、薬剤師会のネットワークとスケールメリットを活かした薬剤師主導の共同研究を助成する制度です。共同研究を行うにあたり、施設間、会員間の連携は非常に大切であると考えられ、このような機会にお互いの施設について知ることができることは非常に貴重だと考えます。そのため、本勉強会はそのネットワークをより強く結ぶ1つの方法になると強く感じたとともに、今回の勉強会を機に、新潟県内の国立病院薬剤師間でこの助成制度を活用できるような多施設共同研究を企画・実施できればと思いました。

稿を終えるにあたり、会の運営にご協力いただいたテルモ株式会社、および、実行委員として、準備等に当たっていただいた大竹将司先生、串田祐亮先生に深く感謝とお礼を申し上げます。

